



洞窟は少し進むと思っていたよりも狭い感じになってきた。足元もちよつと荒れた感じで、気をつけて歩かないとつまずきそうだ。

「結構荒れてるわね」

サラがあたりを見回して言う。この雰囲気なら、ほかのグループが入っていないのも、なんとなく納得出来る。普通の観光客なら、このあたりで引き返すだろう。

「大丈夫ですか？ 足元が悪いから気をつけてくださいね」

「なんとか……。ありがとう」

アンリが美由紀に声をかける。健太が付き添ってはいるが、なんとなく大変そうだ。このあたりの重力は少し弱めに調整されているようだが、本来の月の重力に比べるとまだかなり強い。転んだりすると怪我をするかもしれない。起伏こそ少ないが、洞窟は曲がりくねっていて、先も後も見通せない。

「なんか雰囲気出てきたじゃない。いい感じだわ」

美空は楽しそうだ。

「こら、あんまり先に行くなよ」

美空とデイブがどんどん先に進んでいくので、フランクが後ろから声をかける。洞窟は曲がりくねっているので少し先に行くと姿が見えなくなる。そんな状態で何か起きるとまずいわけだが、二人はそんなことはあまり気にしていなさそうだ。そのうち、とうとう見えなくなってしまう。

「まったく、困った奴らだな」

「まあ、いいんじゃない？ どうせ当分一本道だし」

「でも、大丈夫かな……二人だけで」

「まあ、二人だけでお話ししたいことでもあるんじゃないの？」

「それって……」

アンリはちよっと心配そうだ。もちろん心配のしどころは、他の仲間とは違うのだろうけれども。

さて、それから30分ほど歩いたあたりで、5人はちよっと広い場所に出た。脇に緊急避難用の待避所が作られていて、休憩用のベンチも用意されている。

「あれ、いないねえ、美空たち。このあたりで待ってるかと思ったんだけど」

「まったく、どこまで行ったんだ、あいつら」

「とりあえず、ちよっと休憩しない？」

「そうだな。一休みして、ちよっと連絡をとってみよう」

5人はベンチに腰掛け、フランクがコミュニケーターを取り出す。コミュニケーターは通常はDIと同じ無線回線でVUとインターフェイスされている。相手が、VUに接続可能な場所であれば、どこでも通信ができる。音声や映像は、直接出すこともできるし、必要に応じてアウトバンド信号を使って仮想感覚として共有することもできる。もし、自分や相手がVUに接続できない場所にいた場合、近距離ならば直接無線通信を行うこともできるが、到達距離はあまり長くない。この洞窟内は観光スポットなので、もちろん、どこにいてもVUにはつながるはずである。

「おかしいな、接続反応がないぞ。洞窟内ならどこでもつながるはずだよな」

「そのはずよ。ちよっと待ってね」

サラもコミュニケーターを取り出して表示をのぞき込む。

「たしかに、応答が帰ってこないね。二人ともコミュニケーターを切ってるなんてことないよね。インターフェイス回線の調子が悪いのかな」

「直接呼んでみるか？」

「そうね。洞窟の中だからあまり離れると届かないかもしれないけど、それほど遠くまで行ってなければ・・・」

そう言うと、サラはコミュニケーターを直接通信モードに切り替える。

「うん、反応があるね。つながりそうよ」

「共有してくれ」

「了解。いいよ」

コミュニケーションは音声も出せるが、アウトバンドで情報共有することで、音声だけではなく相手側の様々な情報も共有できる。

「おい、美空、デイク、聞こえてるか？」

フランクが呼びかける。

「フ・・ク、ちよつと・・悪いわ。こっちは・・」

「美空、ちよつと途切れ途切れだ。ビットレートを落としてくれ」

もちろん、こうした伝送は、昔で言うデジタル通信だ。当然ながら、この時代では受け渡せる情報量の最大値は半端端ではない。ただ、通信回線や電波の状態がよくない場合には、伝送速度を落として、信号を冗長化し、エラー訂正を行う必要がある。音質が多少落ちたり、遅延が発生したりするが、かなり微弱な信号でも途切れずに通信ができる。

「これでどう？聞こえてる？」

「ああ、大丈夫だ。今、どこにいる？そもそも、どうして回線がつかないんだ？」

「わからない。ちよつと変な場所に入り込んだみたい。マップも見られないから、どっちへ行ったらいいかもわからなくて」

「もう、勝手に行っちゃうから迷子になるのよ。ちよつと待ってね、こっちのマップ情報を送るから、通ったルートを出してみて」

サラがそう言うと、全員の視野に洞窟のマップが表示される。

「通ったのはたしか・・このルートね」

美空がそう言うと、マップの上に軌跡が表示された。

「そう、で、この先からわからなくなったのよ。マップに載っていない脇道に入っちゃったみたい」

「でも、それって変よね。通行禁止の脇道ならマップに進入禁止マークが出てるはずだけど」

「でも、脇道があるって表示すらないのよね。気がいたら、いつの間にか迷子になってた

わ

「まったく、分かれ道があったら、まずマップを確認するのが基本じゃない。何やってんのよ」

「そんなこと言ってもさあ、まさかマップに載ってないなんて思わないじゃない。それに・・・」

「ちよつと待てよ。そりゃないだろ。どんだん先に行っちゃったのは美空じゃないか。俺はついて行くのが大変だったんだぞ」

「おいおい、仲間割れしてる場合か？とりあえず、そこを動くな。探しに行くから」

「コミュニケーションのビーコンをオンにしといて。たぶん、信号をトレースすれば見つげられると思うから」

「わかったわ。悪いけど、よろしく・・・」

美空はちよつとバツが悪そうな雰囲気である。まあ、このあと向こうではダイブが一方的に責められることになりそうだが。

「まったく、人騒がせな奴らだ。すみませんね、健太さん、美由紀さん。なんか騒ぎに巻き込んでしまった」

「いや、いいんだ。ちよつと心配だから急いで探そう。マップに載ってない場所に行くなら全員で動いた方が安心だろうね」

「そうですね。申し訳ないですが、一緒に来てください」

5人は、広場の先の、さらに洞窟の先へと進んでいった。しばらく進むと脇に細い餅が枝分かれしている場所に出た。

「こっちの道はマップにないな。たぶん、こっちへ行ったんじゃないか？」

「うん、ビーコンはこっちの方から来てるね。まだだいぶ弱いけど」

「僕たちまで迷ったりしないよね」

アンリはちよつと不安そうだ。

「うーん、ないとは言えないけど、とりあえず、ここからは通った道を記録していくから、たぶん大丈夫よ」

「まあ、サラがそう言うんだつたら・・・」

「よし、じゃ進むぞ」

フランクを先頭に、5人は脇道へと入っていった。最後にサラがコミュニケーションデータを使って、ルートを記録しながら歩いて行く。コミュニケーションデータは多機能端末でもある。移動したルートや周囲の環境情報を記録するレコーダーにもなるため、宇宙などで未知の場所を探索する場合は必ず携帯するのである。大昔、携帯電話がコンピュータを内蔵したスマートフォンに変わってから、この種のデバイスはずっと進化を続けている。

「重力は正常みたいだな。ということは、ここも一応はルート内ってことか。でも、どうしてマップがないんだろう」

「わからないわ。でも、情報系の回線は切れてるから、もしかしたら何かのトラブルかもしれないわね。立ち入り禁止表示がまだ出ていないだけなのかも」

「だとしたら、もしここで何かあったら見つけてもらえないかもしれないね」

「そうならないことを祈るしかないな」

そんな話をしながら5人は先に進む。さらに20分ほど歩いた後、また少し広い場所があった、待避所があり、その先で道が枝分かれしている。

「これはどっちだ？」

「うーん、ビーコンが両方から来るわね。先の方で道がつながってるみたいよ」

「じゃ、少なくとも2人はその先にいるってことだな。なら、どっちへ行っても同じか」

「そういうことになるけど・・・ちょっと待ってね。距離差を見てみるから」

サラはちょっと宙を眺めて指を動かしている。コミュニケーションデータのアウトバンドパネルで何か操作をしているのだ。ビーコン信号には固有の繰り返しパターンがあつて、違うルートから来た信号の位相のずれでおおまかな距離差がわかるのである。

「うん、信号のずれから見ると、距離は右の方が少し短そうね」

「じゃ、右だな」

「そうね。この先、道が複雑になってるかもしれないから気をつけて」

「了解だ。じゃ行くぞ」

「あ、ちょっと待って」

サラはそう言うのと待避所の方に歩いて行き、しばらく何かを調べてから戻ってくる。

「やっぱり、ここも回線が切れてるわ。待避所のシステムは生きてるけど、外部との通信はできなさそうね」

「そうか、やっぱり何かトラブルがあったんだな。急いだ方が良さそうだ」

5人は右ルートを先へと進む。やがて、予想通りに脇から別の道が合流し、その先が広場になっていて、さらに枝分かれしている。

「近いね。この右側から、かなり強い信号が来てるわ」

「よし、じゃ進むぞ」

「お二人とも大丈夫ですか？」

アンリが健太と美由紀のほうを見て言う。

「ええ、なんとか」

「僕も大丈夫だ。最悪、美由紀を背負う体力くらいはあるさ」

「あのねー、そこまでひ弱じゃないわよ」

「おっと失礼！」

少し進むと、先の方に人影のようなものが見える。

「おーい、美空、デイク。おまえたちなのか？」

フランクが叫ぶと向こうからも返事があった。美空だ。

「遅ーい。待ちくたびれたわよ！」

「あのなあ、さすがに怒るぞ。誰のせいでいったいこんなところまで来たと思ってるんだ」

「あはは、ごめんごめん。冗談だって。感謝してるから」

「まったく・・・」

フランクはあきれれるが、美空は悪びれる様子もない。デイクはなんとなく疲れ果てたという感じだ。おそらく、ずっと美空に文句を言われ続けていたのだろう。少なくとも甘い会話になった様子はなさそうだ。

「とにかく無事でよかったよ」

と、アンリ。

「よし、急いで戻ろう。あまりここには長居しない方が良さそうだからな」

「そうね。何かトラブってるのはたしかだから、少なくとも情報回線が使えるところまで急いで戻った方がいいわ」

フランクとサラがそう言って、今来た道に戻ろうとした時だった。

「あれ？風？」

美空がつぶやいた。その後、洞窟の奥から、ゴーツという地響きのような音が聞こえてきた。



「何？」

サラも立ち止まってあたりを見回す。

「まずいぞ。気圧が下がり始めてる。壁によって何かにつかまれ！体を低くして頭をカバーしろ」

フランクが叫ぶ。もし、エアシールドがどこかで破れたのならば、一気に空気が吸い出されるから、何かにつかまらないと吹き飛ばされてしまうかもしれないのだ。風で飛ばされてくる物も危険だ。当たれば大怪我をするかもしれない。7人はあわてて洞窟の隅によって身をかがめた。

「何が起きたの？」

「わからない・・・来るぞ、ふんばれ！」

フランクの声をかき消すように、一気に空気が流れて、砂塵やら小石やらいろんなものが飛んでいく。体を持って行かれないようにするのが精一杯で、みんな声も出ない。気圧が一気に下がって、肺の中の空気が流れ出すのがわかる。こんな時に息を止めるのは逆効果だ。下手をすると肺が破裂してしまうから、口を開けて気圧の変化を受け入れるしかない。空気がだいぶ薄くなって風が弱まってきた頃、非常用のエアシールドが作動して、それぞれの周囲にフィールドを形成し、最低限の気圧を維持し始めた。これは個人用の気密シールドだが、あまり長時間は持たない。

「聞こえてる？ 音声共有はうまく行ってるかな？」

サラが叫ぶ。と言っても、これはコミュニケータのアウトバンド疑似聴覚を経由した声だ。エアシールドのフィールドが接していないと音は届かない。間には真空があるからだ。こういう場合は、こうして会話をする。どうやら、様子からすると全員、うまく音声共有は出来ているみたいである。

「少し戻ったところに待避所があるわ。システム自体は正常みたいだったから、急いで！」



7人は、急いで来た道を戻る。足元には風で飛ばされた小石や岩がごろごろがっていて、気をつけないと躓いてしまう。

「きゃっ！」

美由紀が叫び声を上げる。小さな岩に躓いてよろけたところを、健太が受け止めた。

「大丈夫か？」

「ちよつと足をやっちゃったみたい・・・」

「まずいな。よし、とりあえず・・・」

と健太が美由紀に背中を向けてしゃがむ。美由紀をおぶって歩くつもりらしい。

「ごめんね」

「いいって。それより急ごう」

健太は美由紀を背負うと皆の後を追って歩き出す。

「大丈夫ですか？」

「ああ、大丈夫だ。美由紀がダイエットしてくれてたから助かったよ」

「あのねえ、こんな時に・・・」

美由紀が健太の首を絞めにかかる。

「ごめんごめん、首締めるのは止めてくれないかな・・・」

「とりあえず、急ぎましょう。この先、左ルートはダメみたいだから右から行きます。ちよつと狭そうですけど、気をつけてください」

フランクが皆を先導する。サラ、美空、アンリそして健太と美由紀が続き、最後がデイクである。かなり狭くて荒れた道だったが、どうにかエアシールドが切れる前に7人は緊急退避所がある広場にたどりついた。待避所の入り口にはグリーンランプがともっている。空気が抜けると自動的にシステムが起動されるようになっていた。グリーンランプは待避所が利用可能であることを示している。

緊急退避所はドーム型の小さな建物だ。詰め込めば2、30人は入れるだろうか。入り口はエアロックになっていて、5人くらいが一度に入ることが出来る。

「よし、僕とデイブが残るから、みんなは先に入ってくれ」

フランクが言う。

「わかったわ。中の様子は連絡する」

美空はそう言うと、健太と美由紀をうながしてエアロックに入る。アンリ、サラも続く。エアロックのドアが閉まると、すぐに空気が満たされ、それを検知した非常用エアシールドが動作を停止する。気圧が安定すると、内側のドアが開いて、5人は内部に入った。何も無い、がらんとした空間。壁全体が白っぽく光っていて、落ち着いた雰囲気だ。非常時に気持ちを静める効果を意識して作られているのだろう。

壁の一部に管理用のコンソールがはめ込まれている。サラはそれに向かうと、まずエアロックのドアを閉め、外の二人が入れるように空気を抜いた。

「フランク、聞いている？ 中は大丈夫よ。生命維持システムも正常に動いてるわ。でも、通信はやっぱ切れてるみたいね。エアロックを開けるから入ってきて」

「了解だ。これから入る」

しばらくして、ドアが開き、フランクとデイブが中に入ってきた。

「さて、とりあえず急場はしのいだけど、これからどうするかな」

「そうね。通信システムが回復しないと連絡が取れないわ」

サラが、コンソールをゲンコツで軽く叩いて言う。

「でも、かなり広範囲に空気が抜けたみたいだし、救助隊が探しに来るんじゃないのか？」

「そうね。でも、ここは一応閉鎖区画の扱いみたいだし、我々がここにいることは、システム上ではわからないだろうから、もしかしたら厳しいかもしれないわよ。当然、わかってる人たちが先に救助するだろうから」

「この空気はどれくらい持つの？」

美空が聞く。

「そうだな、このサイズの避難所だと、この人数で、持って一日つてところか。救助にそれほど時間がかかることは想定されていないだろう」

ダイブが言う。

「ちよつと待ってね。酸素の残量は・・・7人だと20時間くらいかな。一日は持たなさそうね」

サラが管理コンソールを見て言う。

「よし、とりあえず、なるべく酸素の消費を抑えて、しばらく様子を見よう。10時間を過ぎて助けが来ないようなら、何か手を考えないとね」

ある程度待っても助けが来なければ、なんらかの手段で助けを呼ぶなり、次の手を考えるための時間的な余裕がほしい。フランクはその決断のポイントを10時間後としたわけだ。

「そうね。私はなにか通信手段がないか探してみるわ」

「たのむよ、サラ」

サラが壁際のパネルを操作している間、残りのメンバーは部屋の中で思い思いに休んでいた。出来るだけ酸素の消費を減らすため、座ったり寝転んだりして、なるべく体を動かさないようにする。それがこういう場合の鉄則なのである。

「非常用の発信器もダメね。パワーが入らないわ。どうやらこの区画全体がメンテナンス中みたいね。ここに入れたこと自体がラッキーだったみたいよ」

サラはそう言うと、壁際に座り込んだ。

「まあ、しばらくは空気も持つから少し休みながら、どうするか考えよう」

フランクが言う。

「非常用のビーコンは使えないの？」

と美空。

「ダメだな。この中にいると、コミュニケーターのビーコンは遮られて遠くまで届かないんだ」

ダイブが首を振りながら答える。

「最悪の場合、誰かが助けを呼びに行くか・だが、途中の道がどうなっているかわからないからリスクいだ。次の待避所まで、非常用エアシールドを使っても空気はぎりぎり。途中で道がふさがっていたら、最悪、戻ることもできなくなるかもしれない」

「まだ時間はある。少し休んで、それから考えても遅くない」

「そうだな。体力と酸素温存のために、少し昼寝でもするか」

「あなたたち、気楽なこと言ってるわね。まあ、それ以外にすることもないのは確かだけど」

ダイブとフランクの会話に美空が絡むが、こころなしか元気がない。

「それ、おそろいなんですな」

アンリが、健太と美由紀のブレスレットを見て言う。

「ああ、これ？」

健太が自分のブレスレットを指して言う。

「ちょっと恥ずかしいわよね。柄にもなく、この人が誕生日にくれたんだけど、実はお手製の試作品だったのよ。またしても、実験に巻き込まれたのよね」

と美由紀が不満そうに横から口をはさむ。

「それ、もしかしてD Iユニットなんですか？」

と、デイク。

「うん、D Iユニットなんだけど、ちょっと付加機能をいくつか入れてあるんだ。美由紀が言うとおりに、実験段階の機能なんだけどね」

「それ、さっきからいい感じに光ってますよね。アクセサリとしても使えそうじゃないですか」

アンリが言う。

「それがねえ、聞いてよ。私も最初はそう思ったんだけど、実はこの光が実験のひとつらしいのよ。これが情報を伝達する手段になるらしいんだけど、私には単に光ってるようにしか見えないのよね」

「光で情報って、アウトバンドと接続するんですか？」

「アウトバンド接続の機能もあるよ。インターフェイスがおかしくなった時のメンテナンス用なんだけど。でも、それはスペクトル全体の一部、赤外線領域だけしか使っていないんだ。可視光部分は、V M Iから拾った脳波情報を処理した結果を光で表現している」

「それって、さっきおっしゃってた抽象思考の間接表現ですよ」

アンリが身を乗り出す。

「そのつもり・・だったんだけどね。どうやらまだ処理方法がまずくて、うまく思考を拾えないんだ。つまりは、今のところ単に気持ちを表示しただけに終わっているというのが正直なところだね。まあ、おかげで美由紀が不機嫌になったことだけは、すぐにわかるようになったけど」

「なんか、首に鈴をつけられたみたいで面白くないのよね。まあ、お互い様なんだけど」

「ゆくゆくは、拾った思考をD Iユニット同士で受け渡すことで共有できればいいなと思っ  
ているんだけどね。まだまだ先は長いってのが現実さ」

「私はこれで十分よ。この上、頭の中まで読まれたらたまつたもんじゃないわ」

「以心伝心、つても悪くないと思うんだけどなあ」

「知らないでいられるから平和ってのもあるけど」

この二人は口論しながらも楽しそうである。ブレスレットの光り方もなんとなく同調しているみたいだ。

「面白そうですね。健太さん、よかったら今後、色々情報交換させてもらえませんか？」  
「ああ、望むところだ。こちらこそお願いするよ。君の研究も参考にしたいしね」

どうやら、アンリと健太は意気投合したみたいである。

「まったく、男って、どうしてこう研究とかの話になると子供みたいになるのかしらね」

美空が、なんとなくあきれ顔でつぶやく。

「そうそう。ほんとに子供よね」

と、美由紀。こちらも、なんとなく意気投合している。

「さて、一休みしませんか。この先、ちょっと大変になるかもしれないので」

脇からフランクが声をかけて、その場の話は一旦終了となった。それから、7人は壁の保管庫からブランケットと枕を出して、思い思いに横になった。

照明を少し暗くして、目を閉じたものの、フランクは、なかなか眠れなかった。不思議と不安感はないのだが、先行きが見えない中では、どうしてもあれこれと考えてしまう。メジャーな観光施設だし、こうした事故の可能性は当然ながら考慮されている。誰が中に入ったかもわかっているはずだから、不明者がいれば、このような場所にも搜索の手がのびるだろう。時間はまだ十分に残っている。悲観的になることはない。だが、最悪の事態も考えておかないといけない。その時は誰かが危険を冒してでも助けを呼びに行かなければならない。そうなった時、誰に託すのが一番いいのか。皆、自分が行くと言い出すだろう。はたして、誰が最適かの判断を冷静に出来るだろうか……。そのときは俺が……。そう思うと少し気分が落ち着いた。やがて、フランクも浅い眠りに落ちていた。

そして、どれくらいたっただろうか。静寂はいきなり、甲高いアラーム音で破られた。